
残照

まったくりorz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残照

【Zコード】

N3147C

【作者名】

まつたり。るん

【あらすじ】

章子は夕陽に照らされて赤く染まる町を見るのが好きだった。

夕暮れだ。空は燃えるように赤い。いつの間に季節が変わったのか、少し前ならばもう夜の帳が下りてきている時間なのに、最近はやけに日が落ちるのが遅い。章子は赤く滲む空をじっと見据えた。

章子の住む家から少し離れた所にその森はあった。森という程のものではないかもしない。住宅街を抜けて小高い丘を登ると、鬱蒼とした木々が生え、光は暗い緑に遮られ昼間は薄暗い。森にしては小規模なその場所は、夕暮れの時だけ、傾いた西日が木々の間に差し込み幻想的に彩られる。

その森の終着点は、隣町をはるか下に見下ろす事の出来る章子の秘密基地だ。くすんだ緑の雑草を踏み分け、木々の合間をぬって進むと、唐突にその縁が途切れる。途切れた先は断崖だ。

その断崖に立ち尽くして、真っ赤な夕陽が静かな町の先のもつと静かな所へと沈んでいくのを見るのが好きだった。町は赤く赤く染まり、まるで燃えているようになる。その赤い陽を全身に浴びながら、ああ、自分も燃えているのかもしれない、と、一人うつとりするのだ。

「いつになつたら本当に燃えると思つ？」

ただ夕陽に見とれていた章子は、ふと思い出したよつ、隣に居る凛一に声をかけた。凛一の返答はない。ただ困ったように首を傾げるだけだ。気怠い生温い風が章子の後ろから吹いて、凛一のシャツを揺らした。

【残照】

凛一は口数の少ない男だ。章子はたまにそれに嫌気を感じるが、それでも口喧しくつまらない話をしてくるクラスメイトに比べれば全然ましだと思っている。凛一はいつも曖昧な笑みを浮かべるだけで、章子の言動に何を言つ訳でもなく、ただ後ろをついてくるだけの存在だった。

……影みたいな男。そう、凛一はまさに影みたいな男だ。何を言うでもなく、曖昧な笑みだけを貼り付けた男。章子は、凛一が楽しそうに笑っている顔どころか、クラスメイトとともに会話をしているところすら見た事がない。同じ高校に入つて、ほんの少し背も伸び大人びた凛一に、興味本位で話しかける女子を何度も見たが、やはり彼は章子の後ろで静かに微笑むだけだった。たまにしつこい女子に掴まつてしまつと、凛一は困ったように顔を伏せて消え入りそうな声で、うん、そう、と小さく答えた。そういう女々しい態度は、少し章子を苛立たせた。

「ねえ、もつと毅然と出来ないの？」

呆れたように章子が言つと、凛一はやはり地面を見つめたまま曖昧に笑つた。この男はいつもそつだつた。章子は、もう何年も凛一と共に行動しているが、まともに会話したこともなければ、目が合つた覚えもない。凛一はいつも何かから、もしくは世界の全てから目を背けている、何度もそう感じた。章子は一度、ふとした思い付きから凛一をからかつた事がある。

「そんなに下ばっかり見て、何か面白い事でもあるの？ 影にでもなりたいの？」

凛一は手を伏せたまま微笑むだけだった。ただ、その影のような彼も唯一顔を上げることがあった。それは赤く染まる空を眺めるときだ。一人で木々の影を踏み分け、その秘密基地を見つけたのは、

春のことだった。薄緑の柔らかい匂いに包まれ、アザミや蛇苺の花が色とりどりに揺れた。その色が静かにオレンジに包まれはじめた時、章子は初めて凛一が顔をあげるのを見た。伸びた前髪から覗く端整なつくりの顔立ち、青白い頬も夕陽を浴びて火照っている。黒い瞳は柔らかい光を反射させ、静かに輝いた。章子は惹きこまれる様にその横顔を見つめた。凛一の先に見える空は、炎の先のような橙に染まり、途切れ途切れの薄雲はまるで火の粉を散らしたかのように茜空を彩っている。そんな眩暈を覚える程の空に抱かれる凛一は、燃えていくようだ、と章子は思つた。

その限られた時間の中にだけ存在するかのような世界に章子は惹き込まれた。鮮やかに燃える空、町、そして凛一。普段は影のよつに顔を背けている凛一は、この限られた世界にだけ存在する世界に居たいのかもしれない。そう章子に思わせる程、赤く染まる世界を見つめる凛一の目は、真剣そのもので、また章子の目に映る世界は魅力的なものだった。それはいつしか日課のよつなものになり章子は、やつとつまらない日常から楽しみを見つけた嬉しさに憑かれたように森を進むのだった。凛一も何を言つでもなく章子の後ろを影のように隨つた。

「ねえ、いつになつたら本当に燃えると思ひ~」

恍惚として赤く染まる町を見下ろしていた章子は、ふと隣で空ばかり見つめている凛一に問うた。凛一は、不意に自分に向けられた言葉に、戸惑つて視線を泳がせた。そしていつものように目を伏せて、影のような男へと戻つた。髪の隙間から覗く、あの曖昧な笑みの形に歪む唇を見て、章子はまるで自分がその世界にすら認められていかない存在であるような気分になつて、苦々しく吐き捨てた。

「相変わらずね。つまんない男」

……久々に美し西空を見る事が出来たというの。何だか白けてしまつた。章子は苦い氣分で、オレンジの影をした凜一のシャツが揺れるのを睨んだ。長い梅雨がやつと終わり、この森も久々に燃えるような夕陽を浴びる事が出来るのだ。静かに咲く花も変わった。野罫栗や待つ宵の草の黄色い花が陽を受けて色濃く影を落としている。病に冒されたような山百合もまた甘く香った。

「つまらないよ。僕はここから見える夕陽以外興味が持てない人間なんだ……」

夕暮れも影をひそめた頃、ぽつりと呟いた凜一の声が章子に届いたかは定かではない。章子は空が次第に色を失い始めると同時に、さつさと踵を返して行ってしまったから。森の終わりには、凜一の影と夏草の匂いが薄く揺らぐだけだ。

それから凜一が自分の後をついて来なくなつても、章子は何とも思わなかつた。別に凜一が何を思つていようが、何を望んでいようが、章子にとって、それははどうでもいい事だつたから。凜一は学校に来るのをやめてしまつたらしい。病気とか家の事情とか様々な憶測が飛び交つたが、それはくだらない噂に過ぎない事を章子は知つていた。凜一はあの森に居るのだから。章子が夕空を見に行くと、凜一はいつも木陰に座つて夕陽を眺めていた。そして、章子が話しかけるとやはり曖昧な微笑だけをかえし、すぐに視線を空へと返した。町は相変わらず赤く燃えた。章子は、夕陽に染まる空よりも、この燃えていくよつた町を見るのが好きだと思つた。

全てが燃える、燃やされる、薄い炎の膜の中にあるよつだ、章子はそう思うと楽しくて仕方がなかつた。

その日の夕陽は今までで一番見事なものだった。凛一はいつものよう、月桂樹の根元に寄りかかるように座って、夕陽を見据えていた。季節外れの芥子の花弁がその傍で色褪せて散っているのも陽を浴びて鮮やかに赤く滲んだ。夕暮れだ。空は燃えるように赤い。いつの間に季節が変わったのか、少し前ならばもう夜の帳が下りてきている時間なのに、最近はやけに日が落ちるのが遅い。章子は赤く滲む空をじっと見据えた。森も葉陰にゆるやかな赤い空気を満たしあじめる。

章子は断崖に立ち渴くして、真っ赤な夕陽が静かな町の先のもつと静かな所へと沈んでいくのを見た。町は赤く赤く染まり、まるで燃えているようになる。その赤い陽を全身に浴びながら、ああ、自分も燃えているのかもしれない、と、一人うつとりするのだ。

「こいつになつたら本当に燃えると思つ？」

ただ夕陽に見とれていた章子は、ふと思い出したよつて、隣に座る凛一に声をかけた。凛一の返答はない。ただ困つたよつて首を傾げるだけだ。氣怠い生温い風が章子の後ろから吹いて、凛一のシャツを揺らした。そのシャツも、袖から覗く青白い腕も赤い陽に照らされて美しく揺らめく。柔らかい炎に包まれてゐるようだ、章子は曖昧な笑みを作ることさえやめたらしい凛一の態度に苛立つこともなく赤く染まる世界に心を奪われた。

「こいつの世界がずっと続けばいいのに」

空の色は静かに変わり始めた。べつたりとした炎に照らされていった町は、気だるい夏の空気だけを残して、静かに夜の濃紺に鎮火されはじめる。章子は静かにざわめく薄闇とともに黒い影だけが濃くなつた森を振り返つた。森の先はきっと夜が来ているのだろう。凛一は木の根に背中をあずけたまま、じつと座りこんでいた。彼はもう、その木の影になつてしまつたらしい。章子は凛一をそこに残してそのまま森の中へと踵を返した。

踏みしめる水氣を含んだ夏草が靴底へと纏わりつく。まだ昼間の生命力を残した草木の匂い、土の匂いが暗い空氣に詰め込まれている。あの夕陽ではきちんと燃え尽くせなかつたのだろう。その生温い夜風に混じつて、章子は凛一の匂いを感じた。それはきちんと夕暮れに焼け爛れた匂いだった。薄暗い森を踊るように歩く章子に影はない。凛一の腐乱していく匂いも、この鬱蒼とした森の呼吸の中に消されてしまうだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3147c/>

残照

2010年10月28日08時12分発行